

『祭事録』からみる桐の木平の祭とその周辺

折田 幸

「祭事録」は桐の木平(沢田 14 区 4 組)の親睦団体「温交会」の会計資料のなかから見つかったものである。(2020,2)

祭事録(さいじろく)

この「祭事録」は 165mm ×235mm仕立、和紙縦書、袋綴じ 188 枚、厚紙表装、表紙には、『昭和十四年 祭事録 積善組』の三行組、毛筆で書かれている。



最初のページから見ると、

昭和十四年二月 組合会議執行

昭和十四年度役員

第十四区評議員	関 善平
	湯浅邦吉
	佐々木忠次郎
	木檜伊重郎

取締所常設委員	関 善平
	湯浅邦吉

	佐々木忠次郎
	木檜伊重郎
風習改善実行委員	湯浅邦吉
	関 善平
	宮崎松雄
	佐々木忠次郎
伍 長	石塚守
	本多喜好
衛生委員	竹内徳松
道路担当者	島村奎五郎
祭世話人	平形初五郎
	竹内徳松
中井	今井斧吉
寺世話人	田村萬司

祭世話人 昭和十六年ヨリ二ヶ年間湯浅邦吉就任の筈

続いて、昭和十四年三月 秋葉祭及春期祭執行スの後に、組合員の姓名・業者が連記されている。恐らく、現在四組在住の諸氏の祖父、父親に当たる人であろう。

その氏名を記す。

石塚守	中路生二	北澤鉄太郎	森 勇	佐々木忠次郎	島村虎松
阿部要吉	島村せん	島村幸作	島村良正	小池大五郎	今井斧吉
蜂須賀市太郎	島村實五郎	湯浅邦吉	瀬下喜一郎	田村順造	関 善平
奥木茂三郎	田村萬司	宮崎松雄	田村龍蔵	本多喜好	中村 實
木檜伊重郎	長尾戦治	佐藤 武	小林高重郎	綿貫好蔵	本多富芳
唐澤角次郎	篠崎善太	島村奎五郎	柏原雅夫	平形初五郎	中沢茂重郎
日向野吉之助	山野喜作	山口そよ	高平寅吉	白石久太郎	竹内徳松
山口虎次	島田春吉	新井真司	宮崎知雄	町田勢三郎	竹村利三郎
関口徳松	島村なか	島村たか	唐澤浩平	山田鋭次	森 清松
本多岩雄	森田一良	島村はつ	山本啓蔵	白石政敏	松井久平
電気屋	駐在所	営林署	取締所	玉泉館	

以上、60名と5業者、旅館。昭和21年まで日向見地区が積善組に入っている。

以下、特記事項をいくつか記す。

- 昭和22年まで第14区評議員4名に変更はなく推移している。ただ、ここで言う14区は現在の区割りのものか？
- 昭和15年3月に積善組の「常会」が毎月5日(条件付き)に開かれることが決定。

- 昭和 16 年 3 月秋葉祭及春期祭が行われた際の会費は一戸当たり 1 円 55 銭。

また、当時の物価 リンゴ 10 個 1 円 50 銭
 ブドウ 40 銭(単位不明)
 梨五個 50 銭
 御神酒 2 円 30 銭
 餅米五升 2 円 75 銭

として記載あり。現在の物価と比較してみると面白い。

- 昭和 17 年 3 月 5 日秋葉祭及び春期祭、48 戸出席

4 月 8 日薬師祭典

- 昭和 19 年 3 月 5 日秋葉祭及び春期祭、53 戸、1 戸あたり 1 円 70 銭

- 昭和 21 年 2 月 11 日常会(契約)において日向見方面の常会開設。区域は日向見橋より上手。但し、官行関係は除く 9 軒。

- 昭和 23 年 2 月温交会発足。初代会長に木檜伊重郎。会費 50 円。66 名出席。

8 月青年会協力の下に組内に掲示板設置。

- 昭和 29 年四月温交会総会。この頃より新入会員の紹介あり。町村合併の話。

- 昭和 33 年 3 月関博氏の名前登場(学校林管理委員)

- 昭和 35 年 3 月祭世話人四組と五組交互年番を決める。

- 昭和 40 年 3 月 関博氏座長に。殿界戸火災見舞金。

- 昭和 41 年 3 月折り詰め廃止、会費 150 円と米 1 合。伍長手当 500 円から 1000 円

- 昭和 45 年 3 月温交会の開催を毎年 3 月の第一日曜とする。

温交会を五班に分けているが、その呼び順番号について、

一班 桐の木平林道より上と県道川側。はつしろ旅館より下手

二班 桐の木平県道両側の郵便局長宅、篠崎商店から部長派出所、長尾戦治宅迄

三班 桐の木平一、二班以外地域と辰巳寮まで

四班 積善館から落合通り沿い、テイキを除き住吉屋旅館まで

五班 テイキー一円と森田一良、瀬下喜一郎宅まで

- 昭和 51 年 3 月参加者 70 名。会費 500 円

祭事録の評価

「祭事録」の表紙に昭和十四年とある。「積善組」は現在の桐の木平のことで、関氏の強い影響下にあったことが伺われる唯一無二の資料である。

特に、積善組の存在は此处が「積善町」などと言われたことから積善館関氏の強い影響力の下にあった。その一つの表れとして、関氏積善館のあった平成 20 年代までの温交会では、関氏が上座に座り温交会の会員と対峙した光景からも分かる。また、いずれの年度の役員人事を見ても、関氏が評議員(取締役常設委員も含む)以外の役職の経歴がないことも住民との格差を感じる。

更に、昭和 14 年から 22 年までの評議員をみると関善平、湯浅邦吉、佐々木忠次郎、木曾伊重郎の四氏が当たっていることは注目にあたえる。

扱、「評議員」という言葉であるが、『評議員は、役員の選任並びに重要な業務運営について意見を述べる等、役員の諮問に応じ、独善的運営をチェックする・・・』と定義されているが、ここで言う評議員は積善組の最高機関の意味合いと理解すべきである。つまり、昭和 22 年までは、この四人の意思で祭は運営されてきたと想像される。

昭和 23 年に温交会が発足している。ここで、昭和 23 年に温交会が発足した経緯を考えてみたい。

昭和 20 年 8 月に日本は太平洋戦争の敗戦国となり、GHQ(連合国軍最高司令部)の下で政治、経済、教育、治安など全てにおいて統制を受けた。その一つに、昭和 22 年に GHQ が発した公職追放令(昭和 27 廃止)がある。戦前・戦中公職に加担していた全ての日本人が公職から追放されたのである。澤田村村会議員であった関善平氏も例外でなく公職を失った。同時に、民主化の波のなかで「積善組」の祭も慎重に方向転換したと推測できる。その結果、「温交会」と改めたのではないだろうか。

しかし、一地区の祭の役職までが公職とは認められず、昭和 23 年に温交会が発足してから関氏の評議員は続いたが、昭和 47 年で終わっている。十七代積善館館主関善平も 72 歳の高齢となり、後進に道を譲ったのであろう。

次に、祭事録に現れる評議員は昭和 51 年の佐々木国治、綿貫好蔵、山口吉男、島村喜久松、山口彰吾、田村貴の六名である。その後は一定の間隔をもって評議員のメンバーは替わっている。尚、平成 7 年に評議員の定数を各組四名とする旨の指示が沢田 14 区事務所よりあり、以後現在の四名体制になっている。

一方、標題にした、「・・・桐の木平の祭と・・・」というなかで使っている「桐の木平」の地名についてである。「キリノキタイラ」(桐の木平)は平成 6 年発行の『中之条町の地名』にも「昔桐の木が植えてあった」という解説で口承地名としている。また、明治 41 年に四万小学校の訓導近藤甚平氏が四万温泉について書いているが、その中で

も四万温泉は、犬麦平、山口、新湯、日向、中井の地名のみで、桐の木平の地名はない。次に、「積善組」について触れておく。

桐の木平という集落は、語弊があるかも知れないが、城主関氏積善の下に出来た城下町とも言える。故に、「積善町」と表現された由縁であろう。

三百余年前に関氏が芝付の地に居を構え、爾来、明治以来関氏の下で職を得て根付いた祖父、曾祖父に当たる人たちが作り上げた集落である。

関氏は代々名主の職にあり、村人を束ねるという役目を担い、その精神は子々孫々に継承されていた。恐らく、関氏と住民は、「大家と店子」のような関係が出来たことから住民の生予権に責任を持って当たった。反面、近年まであった主従関係で発生する関氏の威圧的な振る舞いが良好な関係に障害をもたらしたことも推察できる。つまり、「積善組」はこの四万温泉でも特殊な集落を形成したとも言える。

しかしながら、現在桐の木平に住居する人たちは過去の因習から脱却し、更に関氏積善館の終焉と相まって、関氏と住民の関係は過去の遺物となったと実感する人も多いのではないだろうか。

また、新しい積善館の主は、四万温泉と縁もゆかりもない人で、かろうじて、積善館の終焉に深く関係した某氏が居るのみである。従って、積善館と桐の木平住民は以前のような主従関係にも似たものはなく、フラットな関係と言える。但し、積善館の所有する祭神については、従来通りの慣習の下にある。

祭事録は平成8年を以て終わっているが、この間現在のように会長と会計がセットになっていて次期会長に会計が昇格するという方法は見当たらない。その傾向が見られたのは、平成7年に会長中村文二郎、会計中沢太一とあり、翌平成8年の会長が、中沢太一になっている。このことは現在行われている会計担当が二年後に会長になるという制度の始まりか。・・・の思いをもって読み終わったが。

平成8年以降の役員人事について竹内孝夫氏の書いた資料を参考にすると、このことが裏付けられていることが分かる。つまり、会計担当が二年後に会長になるという役員選出の始まりである。(末尾資料参考)

参考資料として、末尾に昭和14年～22年(表-2)、23年～32年(表-3)、33年～平成8年(表-4)、平成9年～31年(表-5)までの役員名を掲載する。

祭 事

日本では古来より万物に神が宿り「八百^{や およろず}万^{かみ}の神」等という表現もある。

延喜式に載っている上野^{こうずけ}(略群馬県)の神社十二社のうちの社は吾妻郡には一つもないが、これに準ずる社は四万温泉にある稲裏神社である。

稲裏神社は平安期に出来た三代実録にも登場する神社で、奥社は稲裏山にあり、里宮として譲葉、原町大宮神社にある。これほど古くはないが、田村氏が四万温泉を切り拓いた室町時代以降この地にも神社はあった。四万温泉の古い絵図にも神社と覚しき建屋が描かれている。人々はこれを崇め奉る事を忘れなかったはずである。

初めのうちは、供物を捧げ、神からの守護を願っていたはずで、やがてこの行為は、祭として発展した。

この地方には三月の初めに行われる「契約」という行事がある。この行事は神主が新春に村の安寧を祈祷する「春祈祷」のなかで行われる地区の行事で、契約自体はその年の役員を地区全員が出席して決めるというものである。

四組桐の木平地区の契約は毎年三月の第一日曜日^{かしわで}に行われる。

神主と祭り世話人は積善館の神棚にお供えをして拍手をうつ、次に積善館本館の裏手にある神社に参拝し、その後、地区全員が一堂に集まり神主の先導で拍手を打つ。神主退席後、常会長が前年の行事や会計報告などを行い、新しい役員を選任して会食する。

契約のルーツについて、『神に対して契約を結ぶ』という説明をミュゼ(歴史資料館)の元館長唐沢定市氏から聞いたことがある、この風習は中之条地区の殆どの地区で行われているそうである。

ところでこの『神に対して契約を結ぶ』つまり、「神との契約」とは一体どういうことなのであろうか。

「神との契約」は一神教、つまり、キリスト教やイスラム教で用いられる言葉で多神教の日本では元来この言葉は存在しない。一神教では「神との契約」が基本で、神と契約した人に対しては神は保護するが、契約しない人(異教徒)は無視する。この場合、人は神に何を契約するのがキリスト教では「聖書」に書かれていて、契約者はこれを守るわけである。

では日本で言う「神との契約」とはどういうことなのであろうか。日本では古くから山、川、滝、岩、木・・・など森羅万象に神が宿るとしてきた。そして、これらを崇め奉る風習が各地にあった。また、これらが進化して古事記、日本書紀に登場する神々もある。つまり、八百万^{や およろず}の神^{かみ}に対し人々は感謝の念をもって接し、供物を捧げ神からの加護を願った。この関係が「神との契約」ではないだろうか。だから、この契約に祭司が立

ち会うのだと思う。

この桐の木平の祭がいつ頃から始まったかは分からないが、十七代積善平氏の回顧録をみると『・・・私が家へ帰った五、六年前に屋台もできて・・・』とある。善平氏は早稲田大学を卒業して帰ったと推測すれば、大正 11 年早稲田大学卒業であるから、大正 6～7 年に屋台が出来て本格的な祭になったものと思われる。また、こうも書いてある。『・・・第一世話人が印入りの提灯こそ持っているが長着を着ている。若い衆は法被を着ているものもいるが長着が多く積善や田村のものか酢酸会社のものでマア土地に関係があるからよいのだが、吾妻通運会社、・・・に至ってはどこの祭だかわからない』ということで、祭の法被を作ることにしたらしい。山口などとも相談して、最終的にできあがったのは大正の終わり頃と回想している。

四万温泉でいつ頃から現在のような祭が行われたかについては定かではない。ある程度の人口がなければ祭も成り立たないであろう。

四万温泉の戸数（人口の変化）

文献上確認できる最初の四万温泉住人は、永禄八年（1565）、山口の地に移住した田村家の先祖といわれている。（「四万温泉異聞」参照）

次に、資料が存在する天和三年、明和年中、明治 25 年、明治 39 年と昭和 56 年の四万温泉の世帯（戸）数変化（人口変化）を表-1 に示す。

表-1 四万温泉の戸数変化（人口変化）

	温泉口	山 口	桐の木平	新 湯	日向見	合 計
天和三年	0	6		4	0	10
明和年中	0	9		11	0	20
明治 25 年	0	10	11	12	0	33
明治 39 年	3	14	22	20	2	61
昭和 56 年	44	43	73 (69)	68	54	282

天和三年及び明和年中の四万温泉は、山口、新湯のみ（現在の桐の木平は新湯に含まれる）（単位 戸数）桐の木平は中井を含む、日向見は譲葉を含む

（）内は同年の温交会出席者数

天和三年（1683）の戸主名

山口戸主名

弥太夫
角右衛門
長右衛門
惣兵衛
藤右衛門
惣太夫

新湯戸主名

彦左衛門
茂左衛門
佐太夫
半三郎

10 戸全て田村一族である。

明和年中(1764～1771)の戸主名

山口戸主名

八左衛門
長右衛門
長太夫
長兵衛
角右衛門
七左衛門
興兵衛
八兵衛
五左衛門

新湯戸主名

文左衛門
佐太夫
茂左衛門
久米八
定右衛門
半左衛門
長左衛門
善之丞
杵右衛門
彦左衛門
善兵衛

20戸である。田村一族の他、積善館の先祖善兵衛が。

明治25年(明和から130後)の四万温泉の戸主の名前

田村与平 田村長七郎 田村巳之吉 唐澤安平 島村喜平次 田村茂三郎
田村重太郎 田村定八 田村久八 湯浅知三郎 島村伊重郎 田村八平
田村七郎次 田村梅次郎 島村八十吉 田村善四郎 田村源太郎 大井原建次郎
関 善平 田村佐平治 佐々木市太郎 島村慶次郎 田村喜衛 田村太三郎
猿谷倉之進 島村三郎平 田村文三郎 田村惣衛 田村長久郎 田村喜伝次
田村長太 尾崎仁左衛門 山口玉吉 以上、33戸

このうち六割強が田村氏である。また、四万温泉では古い家系の島村氏も居る。

明治39年の四万温泉の戸主の名前

田村惣作 田村善四郎 田村喜作 田村伝三郎 田村茂三郎 田村徳三
田村源太郎 田村和五郎 田村宇平 田村勝二郎 長谷川多平 宮崎茂十郎
山口源之助 田村さい 関 善平 西川鶴吉 田村久八 田村長一郎
羽田次第 山口玉吉 田中茂三郎 田村タメ 早川恒佑 島方新二郎
角田時弥 佐々木市太郎 田村佐平次 湯浅せい 中村福太郎 朝日奈富蔵
田村長太 尾崎仁左衛門 田村梅次郎 霜田金七 林 直蔵 田村長七郎
田村長九郎 田村太三郎 猿谷倉之進 田村七郎次 山田今朝太郎 唐澤久平
田村くま 田村喜市 田村八平 田村通蔵 唐澤伝十郎 篠原徳三
大場滝五郎 野村鎖次 諸田万太郎 寺島高吉 島村三郎平 島村八十吉

島村伊重郎 島村奎五郎 宮崎鶴司 奥木茂三郎 田村巳之作 斉藤健三
秋山徳次郎 以上、61 戸

四万温泉の戸数を取り上げたのは、人口の変化を観察するという意味も勿論あるが、意とするのは、四万温泉が田村一族から始まり関氏が居を構え、やがて人々が四万温泉の住民になってゆく過程を見たかったのである。

つまり、先祖が明治 25 年に名前があれば、それ以前に四万温泉の住民になっていたことが判る。又、明治 25 年に名前が無くて、明治 39 年に名前があれば、明治 25 年から明治 39 年の間に四万温泉に移住したことが判る。(但し、相続して名前の変った人もいたので注意)ただ、残念であるのは明治 39 年から昭和 56 年までの資料が無く、これの人は明治末、大正、昭和に移住したと推測せねばならないことである。それらのなかには、大正 12 年の関東大震災、昭和初頭の大恐慌そして、太平洋戦争中もしくは戦後に移住した人も多い。勿論、田村氏はこの限りではない。また、隣県の新潟は、近世以来大量の労働力を全国へと排出し続けてきた地域で、明治から昭和 20 年頃までにおける新潟県の人々が四万温泉に住み着いたという人もいるのではないか。

次に、四万温泉の集落編成を見ると、最初にこの地を開拓した田村氏一族、其処は「山口」という名がついた。それから先は山であったので、「山の入り口」から「山口」である。それから 50 年後元和の頃、田村氏一族の一人が新たの湯を求めて辿り着いたのが「新湯」という地名である。また、四万温泉で最も新しい集落「温泉口」は、以前「文化村」と言った。文化村の名前の由来は、大正末期に斬新な温泉旅館高砂館が開業した事に起因する。元々あった犬麦平という地名を嫌い、「文化の香り」という苦肉で文化村とした。(四万の地名については「四万温泉異聞」参照)

四万温泉は田村氏、関氏がその主体となっているが、島村氏も古い家系である。確たる証拠があるのは、湯原の島村定五郎家(現在この家系があるかは?)の墓誌銘のなかに天和三年のものがある。但し、四万温泉の島村氏がこの家系か否かは判らない。

四万温泉の島村氏は二タ井、ベニ界戸(現在集落なし)、中井などにそのルーツが見られるが、これら島村氏は安全を考慮して温泉より一段高い場所に居住していることを考えれば、田村氏と同時期に居たとも考えられる。

参考資料

表-2 昭和 14 年～²~~23~~ 年の役員

年度	評議員氏名	伍長	祭世話人(祭典幹事)
14 年	関 善平 湯浅邦吉 佐々木忠次郎 木檜伊重郎	石塚 守 本多喜好	本多喜好 平形初五郎 今井斧吉(中井)
15 年	関 善平 湯浅邦吉 佐々木忠次郎 木檜伊重郎	木檜伊重郎 北澤鉄太郎	竹内徳松 唐澤角次郎 蜂須賀市太郎(中井)
16 年	関 善平 湯浅邦吉 佐々木忠次郎 木檜伊重郎	宮崎松雄 島村虎松	唐澤角次郎 森 勇
17 年	関 善平 湯浅邦吉 佐々木忠次郎 木檜伊重郎	田村龍蔵 佐々木忠次郎	湯浅邦吉 篠崎冬至
18 年	関 善平 湯浅邦吉 佐々木忠次郎 木檜伊重郎	島村實五郎 竹内徳松	篠崎冬至 山口寅次 北沢政吉(中井)
19 年	関 善平 湯浅邦吉 佐々木忠次郎	湯浅邦吉 白石久太郎	山口寅次 島村奎五郎 阿部要吉(中井)

	木檜伊重郎		
20 年	関 善平 湯浅邦吉 佐々木忠次郎 木檜伊重郎	奥木茂三郎 山野喜作	若山辰次郎 島村奎五郎 島村惣作(中井)
21 年	関 善平 湯浅邦吉 佐々木忠次郎 木檜伊重郎	中村 實 町田勢三郎	若山辰次郎 山野喜作 今井斧吉(中井)
22 年	関 善平 湯浅邦吉 佐々木忠次郎 木檜伊重郎	田村万司 島村幸作	山野喜作 中沢市太郎 蜂須賀市太郎(中井)

この他の役職に、取締役常設委員、隣保班長、道路担当者、衛生委員などがある。

表-3 昭和 23 年～ 32 年の役員

年度	役職	氏 名
23	顧問 会長 世話人 会計 評議員 伍長 第一班長 第二班長 第三班長 第四班長 祭典幹事	関 善平、湯浅邦吉 木檜伊重郎 山野喜作、宮崎松雄、奥木茂三郎、島村喜久松 田村 貴 関 善平、湯浅邦吉、島村實五郎、佐々木忠次郎、中村 實 竹内徳松、島村喜久松 池田 嘉 本多富芳 北沢政吉 阿部要吉 中沢市太郎、柏原雅夫、小池大五郎(祭世話人)

24	評議員 伍長 祭典幹事 会長 世話人 会計	関 善平、湯浅邦吉、島村實五郎、佐々木忠次郎、中村 實 山口寅次、島村伊佐雄 柏原雅夫、平形初五郎、島村幸作 宮崎松雄 山野喜作、奥木茂三郎、島村喜久松、木檜伊重郎 田村 貴
25	顧問 会長 世話人 会計 評議員 伍長	関 善平、湯浅邦吉 宮崎松雄 山野喜作、奥木茂三郎、島村喜久松、木檜伊重郎 田村 貴 関 善平、湯浅邦吉、島村實五郎、佐々木忠次郎、中村 實 白石政敏、佐々木忠次郎
26	評議員 顧問 会長 世話人 会計	関 善平、湯浅邦吉、島村實五郎、佐々木忠次郎、中村 實 関 善平、湯浅邦吉 宮崎松雄 山野喜作、奥木茂三郎、島村喜久松、木檜伊重郎 田村 貴
27	評議員 連絡委員 伍長 祭世話人	関 善平、湯浅邦吉、島村實五郎、佐々木忠次郎、中村 實 宮崎松雄(会長?) 池田嘉、島村實五郎 白石政敏、本多富芳、北沢政吉
28	評議員 連絡員 伍長 祭世話人 顧問 会長 世話人 会計	関 善平、湯浅嘉雄、島村實五郎、佐々木忠次郎、中村 實 奥木茂三郎 北沢政吉、池田 嘉 本多富芳、森 勇、森 長松 関善平、木檜伊重郎 奥木茂三郎 宮崎松雄、中村 實、佐々木忠次郎、山口彰吾 湯浅嘉雄
29	評議員	関 善平、湯浅嘉雄、島村實五郎、佐々木忠次郎、中村 實

	伍長 祭世話人	湯浅嘉雄、山野喜作 森 勇、山口宗義、佐々木忠次郎
30	会長 評議員 世話人 会計 伍長 祭世話人	中村實 関 善平、湯浅嘉雄、佐々木忠次郎、木曾伊重郎、田村 貴 宮崎松雄、山野喜作、奥木茂三郎、島村實五郎 山口宗義 山口彰吾、柏原雅夫 山口宗義、田村 貴、沼田六郎
31	会長 評議員 世話人 会計 伍長 祭世話人	中村實 関 善平、湯浅嘉雄、佐々木忠次郎、木曾伊重郎、田村 貴 宮崎松雄、山野喜作、奥木茂三郎、島村實五郎 山口宗義、 宮崎勘次、奥木茂三郎 山口宗義、綿貫好蔵、山田勇次
32	会長 評議員 世話人 会計 伍長 祭世話人	木曾伊重郎 関 善平、奥木茂三郎、佐々木忠次郎、中村實、柏原雅夫 木曾伊重郎、宮崎松雄、山野喜作、山口彰吾、島村實五郎 山口宗義 中沢市太郎、瀬下喜一郎 綿貫好蔵、佐藤 武、島村惣作

以上の各年には、会計収支、道路担当人、寺世話人等も記されている。

【註】33年から平成8年までの人事省略。（祭事録」参照）

表-4 昭和33年～平成8年の会長、会計

年度	会長	会計
昭和33	山口彰吾	山口宗義
34	山口彰吾	山口宗義

表-5 平成9年～31年の会長、会計

年度	会長	会計
平成9	中沢太一	佐藤武一郎
10	佐藤武一郎	北沢浩三

35	山口彰吾	山口宗義
36	田村 貴	山口吉男
37	田村 貴	山口吉男
38	湯浅嘉雄	山口倭文
39	湯浅嘉雄	山口倭文夫
40	山口宗義	柏原達三
41	山口宗義	柏原達三
42	白石政敏	壳沢吉明
43	白石政敏	壳沢吉明
44	綿貫好蔵	奥木 茂
45	綿貫好蔵	奥木 茂
46	田村 貴	奥木茂三郎
47	田村 貴	奥木茂三郎
48	佐々木国治	田村長次
49	佐々木国治	田村長次
50	篠崎冬至	中村文二郎
51	篠崎冬至	中村文二郎
52	篠崎冬至	中村文二郎

11	佐藤武一郎	北沢浩三
12	北沢浩三	森田喜一
13	北沢浩三	森田喜一
14	森田喜一	清水 勇
15	森田喜一	清水 勇
16	清水 勇	田村 厚
17	清水勇	田村 厚
18	田村 厚	朝生和則
19	田村 厚	朝生和則
20	朝生和則	篠崎龍夫
21	朝生和則	篠崎龍夫
22	篠崎龍夫	本多雄一郎
23	篠崎龍夫	本多雄一郎
24	本多雄一郎	竹内孝夫
25	本多雄一郎	竹内孝夫
26	竹内孝夫	木檜 肇
27	竹内孝夫	木檜 肇
28	木檜 肇	中村 正

53	竹内徳松	高橋 茂
54	竹内徳松	高橋 茂
55	山口倭文夫	若山光郷
56	山口倭文夫	若山光郷
57	宮崎佑二	山田幸久
58	宮崎佑二	山田幸久
59	宮崎佑二	山田幸久
60	宮崎佑二	山田幸久
61	田村長次	中村邦彦
62	田村長次	中村邦彦
平成 1	奥木茂三郎	北沢浩三
2	柏原達三	中沢太一
3	柏原達三	中沢太一
4	島村惣作	佐藤武一郎
5	島村惣作	佐藤武一郎
6	中村文二郎	中沢太一
7	中村文二郎	中沢太一

29	木檜 肇	中村 正
30	中村 正	山野喜芳
31	中村 正	山野喜芳

平成 9 年～ 31 年の資料は
竹内孝夫氏の提供による

【免責】

私は、四万温泉の生まれであるが、四組の住人になって二十年足らずである。
従って、推論の部分には些かの不備があるので考慮してほしい。

令和二年三月

折田 幸

【参考資料】

祭事録

吾妻郡誌

中之条町誌

積善平(17代)回顧録

田村茂三郎著 「清政 田村甚五郎と其の同族」

中之条町の地名

祭事録の今後の扱いについて】

令和二年三月一日開催の温交会の席上、中村正会長より
「中之条資料館(ミュゼ) に寄贈する」(席上反対意見なし)
を遵守し、四月以降履行いたします。

折田 幸 